

民間ガイドブックにみる横浜市の観光空間

山 口 太 郎*

要 旨

本研究は、ガイドブックに掲載されている観光資源・施設を分類してその空間的分布を分析し、横浜市の観光空間の特徴を見出すことを目的とする。分析対象としたのは、民間の観光ガイドブック6冊と比較対照のための公的観光情報「横浜観光情報」である。「横浜観光情報」から150件、ガイドブックから878件の観光資源・施設を抽出し、分類と地図化を行った。横浜市の観光空間の特徴として、1) ガイドブックに掲載された観光資源・施設は、横浜市18区のうち中区、次いで西区への集中が著しい。とくに飲食施設、物品販売施設、宿泊施設において顕著である。2) レジャー施設と人文観光資源は、他の大分類の施設に比べると上記2区以外への空間的広がりが特徴的である。3) 観光資源・施設が集中する中区、西区と、大分類の種類の多さを考慮して加えた神奈川区と金沢区の4区を、横浜市の観光空間の中心と位置づけることができる。4) 中分類の上位は食事、カフェ、衣料・雑貨類販売であり、これらで約6割を占める。食事の約3割は中華料理が占める。人文観光資源では、公園・庭園の割合が高い。5) ガイドブックに高頻度で掲載されるのは、飲食店では老舗、人文観光資源では建造物である。

横浜市全域のスケールの18区別分析と、観光の中心部となる横浜駅周辺から山手の一帯（横浜中心部）の局地的スケールの地区別分析により、横浜市の観光空間の特徴を多面的に見出すことができた。

キーワード：民間ガイドブック、公的観光情報、観光資源、観光施設、都市観光、横浜市

I. はじめに

観光地は、自然景観、温泉、スキーリゾート、歴史的町並みなど、観光資源によって分類されることが一般的である。この分類の一つに「都市観光」がある。これは、上記のような観光資源（いわゆる「名所」と呼ばれるもの）が存在する場合もあれば、あまり認知されていない（あるいは存在しない）場合もある。前者は、城（城跡）やその周囲の城下町などがその例であろう。後者は、いわゆる「名所」によって都市観光が成立しているというよりも、博物館などの文化施設をはじめ、飲食施設や物品販売施設など観光施設と分類されるものが存在するこ

とで、都市観光が成立している場合もありうる。つまり、都市観光は各都市によって都市観光を成立させている観光資源や観光施設（以下、「観光資源・施設¹⁾」とする）が異なり、多様である。

場所の理解を探究する地理学において、ガイドブックは特定の場所の観光に関する情報が記されたテキストとして分析対象となる。上述のような都市観光の多様性をひもといていく際に、ガイドブックの分析は有効であろう。ガイドブックで取り扱われている観光資源・施設を抽出することによって、当該観光空間の様相を把握することが可能となる²⁾。

観光学や地理学において、ガイドブックを分

* 神奈川大学国際日本学部国際文化交流学科

析対象とした研究事例は豊富に存在する。ここでは観光資源・施設に関する既往研究を中心に整理する。まず、観光学分野から整理すると、正木（2009）は、2002年から2008年のガイドブック4冊を用いて、日光の観光資源・施設を分類し、各ガイドブックの特徴を見出した。今野・十代田・羽生（2002）は、英語で書かれた3冊、日本語で書かれた3冊、計6冊の明治時代後期から昭和20年代後半までのガイドブックを用いて、日光の名勝について記載分量の比較や紹介記述の類型化などを試みた。正木（2015）は、香港で出版された東京のガイドブック2冊、オーストラリア、アメリカ合衆国、フランスで出版された日本のガイドブック3冊、日本の出版社による横浜のガイドブック2冊、計7冊の2010年から2015年までのガイドブックを用いて、掲載されている観光資源・施設を人文観光資源、飲食施設などの10種類に分類した。そして、文化・教育施設や飲食施設、物品販売施設について、アジア系と欧米系のガイドブックでは掲載されている観光資源・施設の傾向が異なることを指摘した。鍵村・中井（2016）は、明治時代中期から平成10年代までの14冊のガイドブックを用いて、箱根における各地区の記述出現時期や、旧東海道とハイキングコースの記述内容を分析した。このように、観光学分野ではガイドブックの特徴を示したり、観光資源・施設の分類を行ったりすることが多い。

次に、地理学分野について整理すると、滝波（1995）は、フランスのギド・ブルーの1990年版を中心に1926年版やコンパクト版も参照しつつ、パリの地域や場所に関する記述内容をイメージ要素として分類し、それらの空間分布やイメージ要素相互間の関係性を提示した。また、ギド・ブルーにおける都市空間記述について、1950年代から60年代にみられたシチュアシオニストによる都市空間記述との類似点、相

違点を見出しながら読み解いた。西山・加賀美（2016）は、行政によって発行された、英語で書かれた3冊、日本語で書かれた2冊、計5冊の昭和時代初期のガイドブックを用いて、横浜の観光地点を日本的、異国的、近代的という特性に分類し、ガイドブックでの記述が政治社会情勢に左右されていることを指摘した。これらの研究事例では、当該地域の空間イメージを、時代背景、政治などの社会情勢、思想などを踏まえて考察している。

誌面の使い方に注目し、一つの観光資源・施設における誌面の面積や記事の字数などを分析する方法は、主に着地型のガイドマップ分析にみられる（たとえば内田1998, 2004）が、山口（2015）は、2013年から2015年までに発行された長崎のガイドブック6冊の写真掲載枚数を観光資源・施設ごとに示し、長崎市の観光空間の特徴を見出した。

ガイドブック発行時期間を比較して、特徴的な観光資源・施設の変遷を明らかにする研究事例もみられる。浮田・伏見（1999）は、江戸時代から1998年までの間に発行された18冊の、旧河内国を中心とする大阪府枚方市、寝屋川市、門真市、東大阪市など10市を取り上げたガイドブックを用いて観光資源・施設の分類を行った。高槻（2004）は、江戸時代から2000年までの間に発行された7冊の東京のガイドブックを用いて観光資源・施設を分類し、その件数の増減から時期別の傾向を見出した。有馬（2015）は、1995年から2014年までに発行された『るるぶ富士山』を用い、テキスト分析によって時期ごとに特徴的な用語がみられることを指摘した。澁谷（2018）は、1974年から1998年までに日本で発行された4冊の韓国についてのガイドブックを用いて、空間イメージと観光資源・施設の掲載の変遷を示した。河本・金子（2014）は、英語のガイドブック『Lonely Planet Japan』の2000年版と2013年版を用い

て、関西地方における観光資源・施設を分類した。また、記述の内容をトピック的に紹介しているが、地域ごとの集計がなされている点に空間的分析を確認できる。

河本・金子（2014）や西山・加賀美（2016）では、日本のガイドブックと英語のガイドブックを分析対象としている。同じく、松山（2012）は、『Lonely Planet Japan』の2009年版と、比較対象として2011年発行『るるぶ東北'12』と山形県観光協会が発行している英文パンフレットを用いて山形県庄内地域の記述を比較し、前者に自然志向や民俗志向があることを指摘した。日本のガイドブックと韓国のガイドブックを分析対象とした澁谷（2011）は、韓国で発行されている15冊の日本のガイドブックと4冊の東京のガイドブックを用いて、観光地点の件数や分布を示した。澁谷（2012）は、韓国で発行されている4冊の東京のガイドブックを用いて、都市商業施設やエンターテインメント関連の観光地点が多く取り上げられていることを指摘した。また、六本木やお台場などの地区の記述を紹介し、さらにドラマロケ地やサブカルチャーに特化した2冊のガイドブックの検討も行った。澁谷の両研究では、日本というスケールで各都市を、東京というスケールでお台場や六本木のようないわゆる「まち」を点で表す主題図を作成した。

鈴木・若林（2008）は、日本語で書かれた3冊、英語で書かれた3冊、計6冊の東京のガイドブックを用いて、観光資源・施設の住所データのジオコーディングによって分布図を作成した。その結果、詳細な空間分析を可能とした。日本のガイドブックと英語圏のガイドブックを比較し、英語圏のガイドブックでは、観光資源・施設の分布範囲が狭く、また、文化的観光資源が豊富な上野や浅草、外国人向け盛り場の六本木などの頻度の高さに特徴があることを指摘している。南宮（2017）も同様の手法で、韓

国語で書かれた3冊、中国語で書かれた3冊、計6冊の東京のガイドブックを用いて、出現頻度の分析と分布図の作成を行った。

観光学にせよ、地理学にせよ、ガイドブックの分析手法の一つとして、観光資源・施設を分類することによって、当該地域の観光地としての特徴を捉える点があげられる。時間軸上の複数の時点进行分析対象とする研究や、日本語と外国語のガイドブックを比較する研究が存在する点も両学問分野に共通する。

観光学と地理学のガイドブック分析の相違点の一つとして、対象とする観光資源・施設の違いが指摘できよう。地理学では、「名所」をはじめとする観光資源のみを対象としている研究が散見される。それに対し、観光学では飲食施設や物品販売施設などの観光の補助的施設も分析対象としていることがほとんどである。本研究が対象とする都市観光地域は、他の観光地域に比べ、飲食施設や物品販売施設が多いことは明らかである。都市観光では、これらが観光の補助的施設というよりも主たる目的となっている場合もある。

観光資源・施設、もしくは観光地などの空間分布を地図によって示した研究は、滝波（1995）、鈴木・若林（2008）、澁谷（2012）、西山・加賀美（2016）、南宮（2017）があてはまる。観光学では、鍵村・中井（2016）が箱根という地域スケールの内部で、より狭い地区スケールの出現時期が各地区で異なることを指摘している点で空間的分析がみられるが、地図作成には至っていない。

これら既往の研究を踏まえて、本研究では民間出版社の観光ガイドブックを分析対象とし、観光資源・施設の分布を地図化して地理学的研究を行う。比較対照するために、公的機関の観光情報サイトも対象とする。また、観光資源・施設には、飲食施設や物品販売施設など観光の補助的施設も含めて、都市観光の分析を試みる。

研究対象地域には、神奈川県横浜市を選定した(図1)。図2に示したように、新型コロナウイルス(COVID-19)感染拡大以前の2019年までの数年間、横浜市への観光入込客数(延べ数)は5000万人前後で推移していた³⁾。横浜市は横浜中華街が代表的な観光地区の一つであり、この地区の主な観光資源・施設が飲食施設であることは言うまでもない。本研究では、民間ガイドブックと公的観光情報サイトに掲載されてい

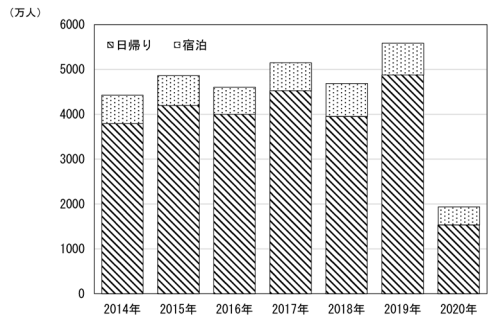


図2 横浜市の観光入込客数(延べ数)の推移
(各年「横浜市記者発表資料」により作成)

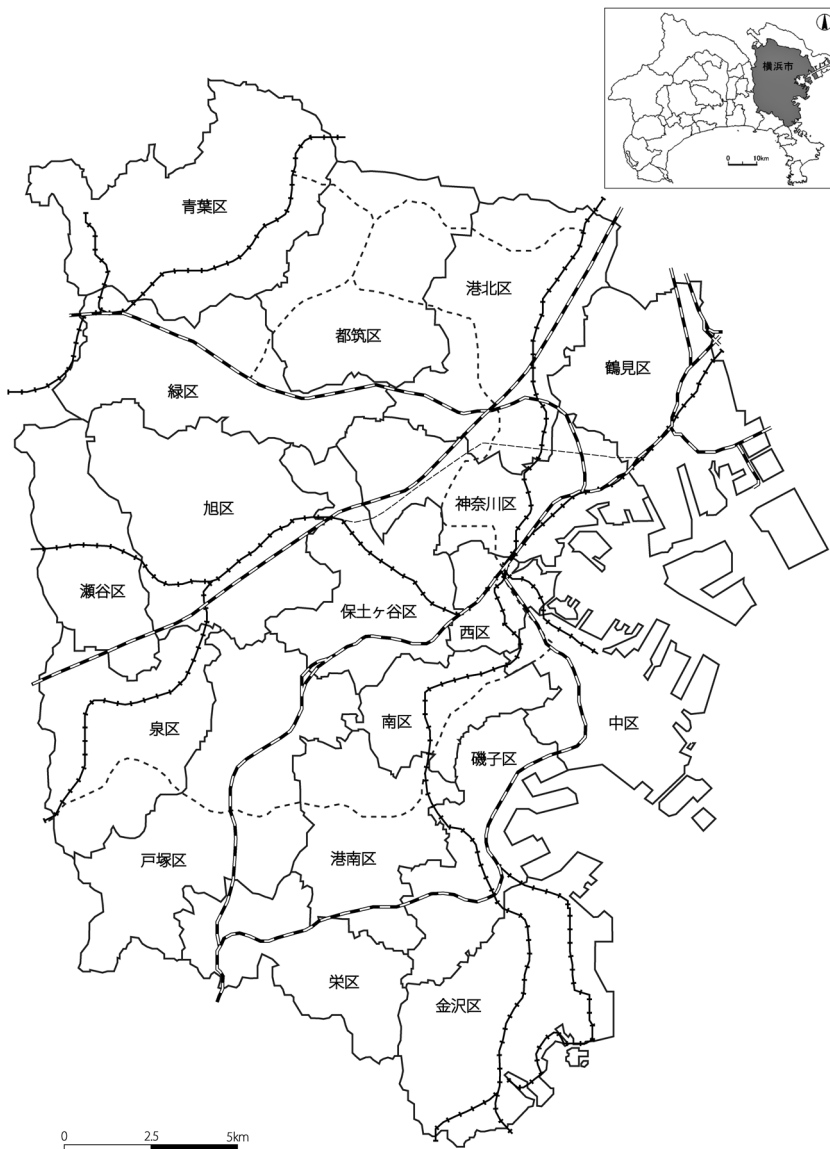


図1 研究対象地域

る観光資源・施設を分類してその空間的分布を分析し、横浜市の観光空間の特徴を見出すことを目的とする。

ところで、横浜市は人口370万人以上を有する日本最大の市である。この人口規模を成り立たせているのは東京との近接性である。東京のベッドタウンと位置づけられ、横浜市は住宅都市であるともいえる。このように、市域というスケールで横浜を検討するならば、「観光地横浜」という側面と「住宅地横浜」という側面がある。本研究では、そのうち「観光地横浜」の空間的特徴を見出すことを目指す。その点で本研究は、観光地理学という系統地理学的側面よりも、横浜市の地域性を探る観光地誌的側面が強いことを明記しておく。

II. 調査方法

1. 分析対象のガイドブックと公的観光情報

分析対象とする民間の観光ガイドブックは、手持ちサイズといえるB6サイズ程度のもので、2021年から遡って5年以内のものとした。具体的には、『まっぷる 横浜中華街・みなとみらいmini』（昭文社2021）、『ことりっぷ 横浜』（昭文社2019a）、『COLOR + PLUS横浜』（昭文社2019b）、『るるぶ 横浜 中華街 みなとみらい 超ちいサイズ』（JTBパブリッシング2021）、『ココミル 横浜 中華街』（JTBパブリッシング2019）、『おとな旅プレミアム横浜』（TAC出版2021）、の3社6冊である。調査時点の2021年から過去5年以内の発行書を資料としたのは、都市部では飲食施設や物品販売施設の入れ替わりが激しいためである。

比較対照のための公的観光情報として、公益財団法人横浜観光コンベンション・ビューローが運営する「横浜観光情報」サイト掲載の「横浜の観光スポット」の一覧⁴⁾を用いる。

2. 調査方法

本研究では、ガイドブック6冊と「横浜観光情報」に掲載されている観光資源・施設について、①名称、②所在地⁵⁾、③種類の3項目を抽出した。行方向に観光資源・施設、列方向に①から③の項目を並べた地理行列を作成した。「横浜観光情報」は150件（行）、ガイドブックは重複を除き878件（行）となった。ガイドブック掲載の最大件数は『まっぷる』の508件、最小件数は『ことりっぷ』の181件である。6冊のガイドブックの平均掲載件数は282.3件である。この行列からいくつかのクロス集計表を作成したり、GISを用いて地図を作成したりする手順をとった。

③観光資源・施設の種類は、以下のように分類した。まず、ガイドブックに示されている分類をもとに小分類を行った。その後、中分類と大分類は、溝尾（2009）などの観光学のテキストを参照して設定した。本研究で設定した中分類と大分類は表1に示した。次章からの分析では、主に中分類と大分類を用い、小分類は必要に応じて使用する。小分類の例を示しておくと、大分類「飲食施設」の中分類の一つに「食事」があり、この中分類「食事」における小分類に「中華料理」、「イタリアン」、「酒場」、「フレンチ」などがある。

3. ガイドブックにおける横浜の観光地区の設定

ガイドブックの冒頭では通常、対象となる観光地域全体の地図が提示され、いくつかの中心的な観光地区について、地区名と25～70字程度の概要が紹介されている。本節では、分析対象とした横浜の6冊のガイドブックにおける観光地区の設定を確認する。表2は、各ガイドブックの観光地区の名称をまとめたものである。

ガイドブックでは、まず横浜駅周辺から山手までの一帯が横浜の観光地域として提示されている。この一帯には、神奈川県庁、横浜市役所

表1 本研究における観光資源・施設の分類

大分類	中分類
人文観光資源	公園・庭園, 建造物, 宗教施設, 土木・モニュメント
文化・教育施設	博物館・美術館, 文化施設
レジャー施設	動物園・植物園, 遊園地・テーマパーク, エンタメ施設, スポーツ施設, 温浴施設, リラクゼーション, 工場見学
飲食施設	食事, カフェ, バー, テイクアウト, 飲食店街・フードコート
物品販売施設	飲食料品販売, 衣料・雑貨類販売
複合施設	複合商業施設
宿泊施設	宿泊施設
その他	コンベンション施設, 観光案内施設

(各ガイドブックにより作成)

表2 横浜の各ガイドブックにおける観光地区設定

ガイドブック	中心部						郊外
まっふる	横浜駅周辺	みなとみらい		山下公園・関内・馬車道	横浜中華街	山手・元町	〈横浜郊外〉
ことりっぷ	横浜駅周辺	みなとみらい		山下公園, ハイカラ建築*	中華街	元町, 山手	
COLOR+PLUS	横浜駅周辺	みなとみらい		山下公園・馬車道	横浜中華街	山手・元町	
るるぶ	横浜駅周辺	みなとみらい		山下公園・馬車道	横浜中華街	山手・元町	
ココミル	横浜駅	みなとみらい		馬車道・山下公園	中華街	元町・山手	〈郊外〉
おとな旅	横浜駅周辺	みなとみらい	伊勢佐木町・野毛	関内・山下公園周辺	横浜中華街	元町・山手	金沢文庫・金沢八景

*: 該当する地区が馬車道～日本大通りとの説明あり。

〈 〉: 地図がない。

(各ガイドブックにより作成)

があり, また, 横浜駅前やみなとみらいなどの中心業務地区も含まれる。本研究では, この一帯を「横浜中心部」と位置づけておく。この横浜中心部内部では, 1冊を除いて, ほぼ同じ観光地区を設定している。すなわち, 横浜駅周辺地区, みなとみらい地区, 山下公園・関内・馬車道地区, 横浜中華街地区, 山手・元町地区で, 山下公園・関内・馬車道地区については, その組み合わせに若干の違いがある。1冊のガイドブックにのみ記載のある伊勢佐木町・野毛地区も含めて, これらの地区の位置を地図に示したものが図3である。中華街, 元町, 山手, 山下公園, 関内, 馬車道は中区に属する。「みなとみらい」は中区と西区にまたがる⁶⁾。横浜駅は西区に位置するが, 駅北側は神奈川区である。

ほかに6冊中3冊で, 金沢区の金沢文庫・金

沢八景といった, 上述の横浜中心部に対する郊外を取り上げている。郊外について, 1冊は位置図を示しているが, 2冊は地図がない。

III. 「横浜観光情報」からみた 横浜市の観光空間

1. 観光資源・施設の大分類—ガイドブックとの比較—

本節では, ガイドブックと比較しながら, 「横浜観光情報」における観光資源・施設の大分類について述べる。表3は, 「横浜観光情報」とガイドブックに掲載された観光資源・施設の大分類別件数とその割合を示したものである。

まず, 「横浜観光情報」150件, ガイドブック878件という総数の大差が指摘できる。



図3 ガイドブックにおける観光地区
主要観光資源・施設を●で示し、いくつかは名称を記載した。
（各ガイドブックにより作成）

表3 「横浜観光情報」とガイドブックにおける
観光資源・施設の大分類別掲載件数

	「横浜観光情報」		ガイドブック（6冊計）	
	件	(%)	件	(%)
文化・教育施設	50	33.3	38	4.3
人文観光資源	42	28.0	59	6.7
レジャー施設	27	18.0	51	5.8
複合施設	21	14.0	31	3.5
飲食施設	4	2.7	512	58.3
物品販売施設	0	0.0	155	17.7
宿泊施設	0	0.0	30	3.4
その他	6	4.0	2	0.2
計	150	100.0	878	100.0

（「横浜観光情報」と各ガイドブックにより作成）

次に、「横浜観光情報」は、大分類「文化・教育施設」、「人文観光資源」、「レジャー施設」、「複合施設」の順に割合が高い。「人文観光資源」、「レジャー施設」、「複合施設」は、ガイドブックでは割合が低い、件数はガイドブック

の方が多い。それに対して、第1位の「文化・教育施設」は件数も割合も「横浜観光情報」の方が上である。公的観光情報では「文化・教育施設」の内容が非常に詳細であるといえる。「横浜観光情報」の運営者である横浜観光コンベンション・ビューローは観光客の誘致や観光振興を目的としており⁷⁾、「文化・教育施設」の詳しさは観光客来訪の多さを反映しているというより、訪れてほしい観光資源・施設として「文化・教育施設」を多数掲載している面もあると考えられる。なお、オンライン情報の「横浜観光情報」と違って、紙媒体のガイドブックには紙幅の制約があることにも留意する必要がある。

一方、ガイドブックで半分以上を占める大分類「飲食施設」や掲載件数第2位の「物品販売施設」の情報は「横浜観光情報」にほとんどない。「飲食施設」、「物品販売施設」は小規模な

民間の店舗が圧倒的に多く、公的機関としては特定の店を推奨するような情報の出し方ははばかられるためであろう。掲載件数ゼロの「宿泊施設」も同様であると考えられる。したがって、「飲食施設」、「物品販売施設」、「宿泊施設」も含めて横浜市の観光空間を検討するには、公的機関の観光情報を参照するだけでは不十分であり、ガイドブックの方が資料として適切であることがわかる⁸⁾。

ただし、民間出版社発行の観光ガイドブックでは横浜市の情報にこだわる必要がなく、実際のところ、表2には載せなかったが、『おとな旅プレミアム 横浜』には川崎市武蔵小杉についての記載がある⁹⁾。逆に、横浜市内の観光資源・施設であっても、観光の中心である横浜中心部から遠いものやアクセスのよくないものは掲載されない可能性が高くなる。これに対して、横浜観光コンベンション・ビューローは公的機関であり、「横浜観光情報」を「横浜市観光公式サイト」と呼んで、明らかに横浜地域全体をカバーすることを意識している。「横浜の観光スポット」の説明でも、「横浜市内の人気観光スポット」と明記している。公的機関とし

ては、特定の地域の情報を載せたり省いたりすることは遠慮されるであろう。したがって、厳密に横浜地域の観光空間を検討するには、公的観光情報の方が適切とも考えられる。

2. 観光資源・施設の空間的分布—ガイドブックとの比較—

本節では、観光資源・施設の空間的分布を検討する。図4と図5は、それぞれ「横浜観光情報」とガイドブックに掲載された観光資源・施設の件数を横浜市18区別に示したものである。「横浜観光情報」と比べると、ガイドブックでは南区と栄区がなくなり、逆に保土ケ谷区の観光資源・施設が掲載されている。全体としては、両資料の分布範囲はほぼ同じであり、前節で憂慮したガイドブックのカバー範囲の狭さはあまり認められない。したがって、横浜市の観光空間の研究資料として民間ガイドブックを使用することにそれほど問題はないと考えられる。

次に、いずれの資料においても、観光資源・施設が中区にきわめて集中していることがわかる。「横浜観光情報」では150件中76件

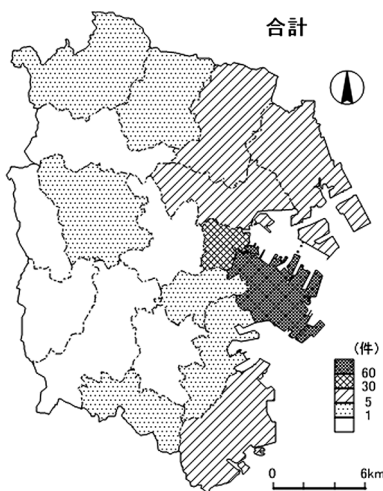


図4 「横浜観光情報」における観光資源・施設の
区別掲載件数
(「横浜観光情報」により作成)

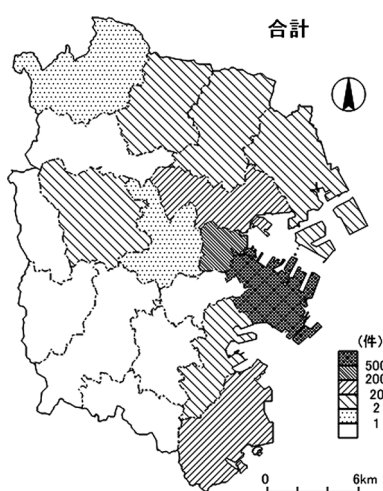


図5 ガイドブックにおける観光資源・施設の
区別掲載件数
(各ガイドブックにより作成)

(50.7%)、ガイドブックでは878件中580件(66.1%)である。掲載件数は半分以下になるが西区が続く、「横浜観光情報」に34件(22.7%)、ガイドブックに233件(26.5%)掲載されている。ほかの区の掲載件数は少なく、神奈川区は前者に6件(4.0%)、後者に28件(3.2%)、金沢区は前者に11件(7.3%)、後者に20件(2.3%)、港北区は前者に7件(4.7%)、後者に4件(0.5%)である。これら以外の区は、わずかの掲載か掲載なしである。「横浜観光情報」にもガイドブックにも観光資源・施設が掲載

されていない区は、緑区、瀬谷区、泉区、戸塚区、港南区の5区である。空間的にみれば、中区を中心とした臨海部に観光資源・施設が集中している。それに対し、内陸部、とくに西部に位置する区においては、少なくとも公的観光情報やガイドブックに観光資源・施設がみられない。このように、横浜市の観光資源・施設の分布には空間的な偏在が確認できる。

3. 観光資源・施設（大分類）の空間的分布

本節では、「横浜観光情報」の観光資源・施

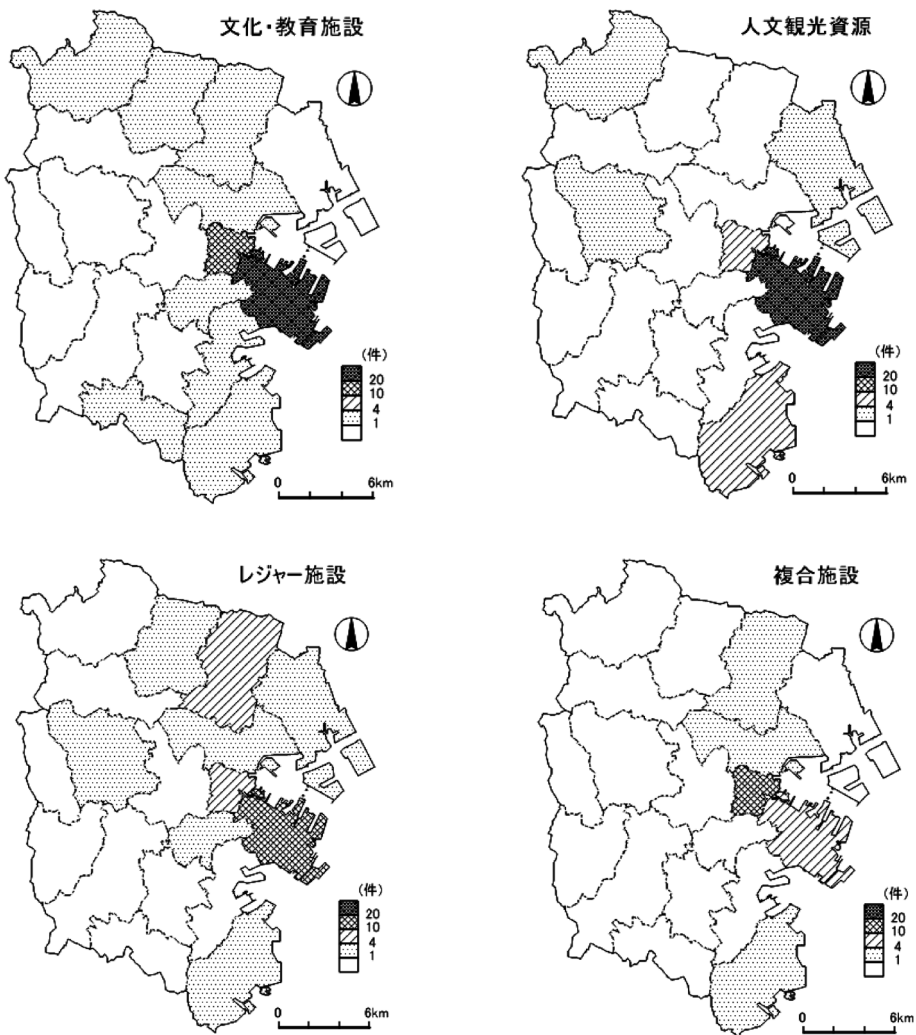


図6 「横浜観光情報」における観光資源・施設（大分類）の区別掲載件数
（「横浜観光情報」により作成）

設について、大分類ごとに空間的分布を検討する。図6は、大分類の上位四つについて、掲載件数を横浜市18区別に階層的に示したものである。

大分類「文化・教育施設」は10区に分布し、広域的な広がりがうかがえる。ただし、中区に50件中28件（56.0%）が集中し、次いで西区に11件ある。ほかには神奈川区に3件、磯子区に2件であり、それ以外の6区は1件ずつにすぎない。

大分類「人文観光資源」は6区に分布する。中区を中心として臨海部に多少偏っているが、市内に分散して立地する傾向にある。内陸部の青葉区、旭区の「人文観光資源」は中分類「公園・庭園」である。金沢区は全6件のうち4件が、鶴見区は全3件のうち2件が「公園・庭園」である。また、中区や西区においても、山下公園や臨港パークなど、横浜中心部に位置している公園（10件）や、歴史的建造物も存在する中区本牧の三溪園がある。このように、「人文観光資源」の代表的な資源である「公園・庭園」は、市内に分散して位置しているといえる。

大分類「レジャー施設」は9区に分布する。大分類「人文観光資源」の分布とは異なり、散在しておらず、中区を中心に市内東側に比較的集中している。中分類「エンタメ施設」は中区と西区に分布するが、その他の施設は市内に分散している。

大分類「複合施設」は5区に分布する。西区に21件中10件（47.6%）、中区に6件（28.6%）が集まっている。ほかには神奈川区と金沢区に各2件、港北区に1件ある。西区、中区、神奈川区を足すと、18件（85.7%）となる。神奈川区の分布は横浜駅周辺、西区の分布は横浜駅周辺とみなとみらい駅周辺、中区の分布は桜木町駅とみなとみらい新港地区に集中している。

4. 観光資源・施設の中分類

本節では、「横浜観光情報」における観光資源・施設の中分類を示し、代表的な観光資源・施設について述べる。表4は、「横浜観光情報」に掲載された150件の観光資源・施設の中分類別件数とその割合を示したものである。

大分類「文化・教育施設」の中分類「博物館・美術館」の割合が最も高いことがわかる。同じ大分類に属する「文化施設」が第4位になっている。「文化施設」は能楽堂や演芸場のほか、ホール、ギャラリーなどで構成される。件数第2位は中分類「複合商業施設」であり、以上のような都市ならではの観光施設が上位となっていることがわかる。

大分類「人文観光資源」では、中分類「公園・庭園」が観光資源・施設全体の第3位となっている。第5位の中分類「建造物」は、横浜三塔と呼ばれる横浜市開港記念会館（ジャックの塔）、横浜税関（クイーンの塔）、神奈川県

表4 「横浜観光情報」における観光資源・施設の中分類別掲載件数

大分類	中分類	件	(%)
文化・教育施設	博物館・美術館	34	22.7
	文化施設	16	10.7
人文観光資源	公園・庭園	19	12.7
	建造物	10	6.7
	宗教施設	5	3.3
	土木・モニュメント	8	5.3
	エンタメ施設	7	4.7
レジャー施設	スポーツ施設	7	4.7
	動物園・植物園	5	3.3
	遊園地・テーマパーク	4	2.7
	温浴施設	3	2.0
	工場見学	1	0.7
複合施設	複合商業施設	21	14.0
飲食施設	食事	2	1.3
	カフェ	2	1.3
その他		6	4.0
計		150	100.0

（「横浜観光情報」により作成）

庁本庁舎（キングの塔）のほか、中区山手の洋館群で構成される。中分類「宗教施設」は、中華街の関帝廟、媽祖廟^{まそびょう}のほか、鶴見区の總持寺、金沢区の称名寺、西区の伊勢山皇大神宮である。中分類「土木・モニュメント」は、中区の汽車道、日本大通りのほか、ハンマーヘッド、マリントワー、西区のランドマークタワー展望フロアなどで構成される。

大分類「レジャー施設」では、中分類「エンタメ施設」と「スポーツ施設」が上位となっている。「エンタメ施設」は、中華街の占いの店舗を含む施設などで構成される。中分類「スポーツ施設」は、スタジアム、スケート場、プールなどである。中分類「動物園・植物園」は、よこはま動物園ズーラシアなど、中分類「遊園地・テーマパーク」は、横浜八景島シーパラダイス¹⁰⁾や横浜アンパンマンこどもミュージアム¹¹⁾などで構成される。

IV. ガイドブックからみた 横浜市の観光空間

1. 観光資源・施設の大分類と空間的分布

ガイドブック全体における観光資源・施設の大分類別割合については、III章1節と表3で触

れたとおりである。「飲食施設」が878件中512件、58.3%を占め、次いで、「物品販売施設」が155件、17.7%である。この二つの大分類で全体の約4分の3となり、割合が非常に高い。これらの情報がほとんどない「横浜観光情報」とは大きく異なるガイドブックの特徴である。「人文観光資源」など他の大分類については、それぞれ30～60件程度、数%の割合で掲載されている。公的機関によるオンラインの「横浜観光情報」と違って、民間出版社のガイドブックは売れることが必要であるため、購入者の求める情報、すなわち観光客が実際に多く訪れている観光資源・施設の内容がより盛り込まれていると考えられる。

本節では、まずガイドブックによる大分類別割合の違いについて検討する。表5は、6冊のガイドブックそれぞれにおける観光資源・施設の大分類別掲載件数とその割合、掲載件数の平均を示したものである。平均掲載件数では大分類「飲食施設」が1位で、2位の大分類「物品販売施設」の約3.3倍である。各ガイドブックにおいても「飲食施設」の掲載率が最も高いが、その占める割合には、最大21.8ポイントの差が生じている。各ガイドブックの掲載率の差が二番目に大きいのは、平均掲載件数3位の大分類

表5 各ガイドブックにおける観光資源・施設の大分類別掲載件数

	まっぷる (昭文社)		ことりっぷ (昭文社)		COLOR+ (昭文社)		るるぶ (JTB)		ココミル (JTB)		おとな旅 (TAC)		平均
	件	(%)	件	(%)	件	(%)	件	(%)	件	(%)	件	(%)	
飲食施設	324	63.8	98	54.1	109	58.6	151	48.9	97	42.0	133	47.7	152.0
物品販売施設	87	17.1	29	16.0	29	15.6	59	19.1	45	19.5	29	10.4	46.3
人文観光資源	20	3.9	23	12.7	20	10.8	26	8.4	30	13.0	45	16.1	27.3
レジャー施設	24	4.7	6	3.3	11	5.9	25	8.1	19	8.2	16	5.7	16.8
文化・教育施設	19	3.7	9	5.0	6	3.2	18	5.8	17	7.4	26	9.3	15.8
複合施設	16	3.1	9	5.0	8	4.3	15	4.9	11	4.8	17	6.1	12.7
宿泊施設	18	3.5	6	3.3	3	1.6	15	4.9	11	4.8	12	4.3	10.8
その他	0	0.0	1	0.6	0	0.0	0	0.0	1	0.4	1	0.4	0.5
計	508	100.0	181	100.0	186	100.0	309	100.0	231	100.0	279	100.0	282.3

(各ガイドブックにより作成)

「人文観光資源」であり、最大12.2ポイントの差がある。各ガイドブックにおいても、掲載率3位のガイドブックが4冊ある一方で、1冊は2位、1冊は4位となっている。このようなガイドブックによる掲載率の違いが、横浜のガイドブック特有のものであるか、あるいはガイドブックの出版社やシリーズによる一般的な傾向であるかは、事例研究を蓄積して検討する必要がある。

次に、大分類の空間的分布を検討する。図7は、大分類のうち「人文観光資源」、「レジャー施設」、「文化・教育施設」、「複合施設」それぞれの掲載件数を、区別に階層的に示したものである。

大分類「人文観光資源」は6区に分布する。中区に59件中44件（74.6%）、西区に8件（13.6%）あり、2区で52件、88.1%を占める¹²⁾。この2区以外での件数はわずかである。空間的には2区

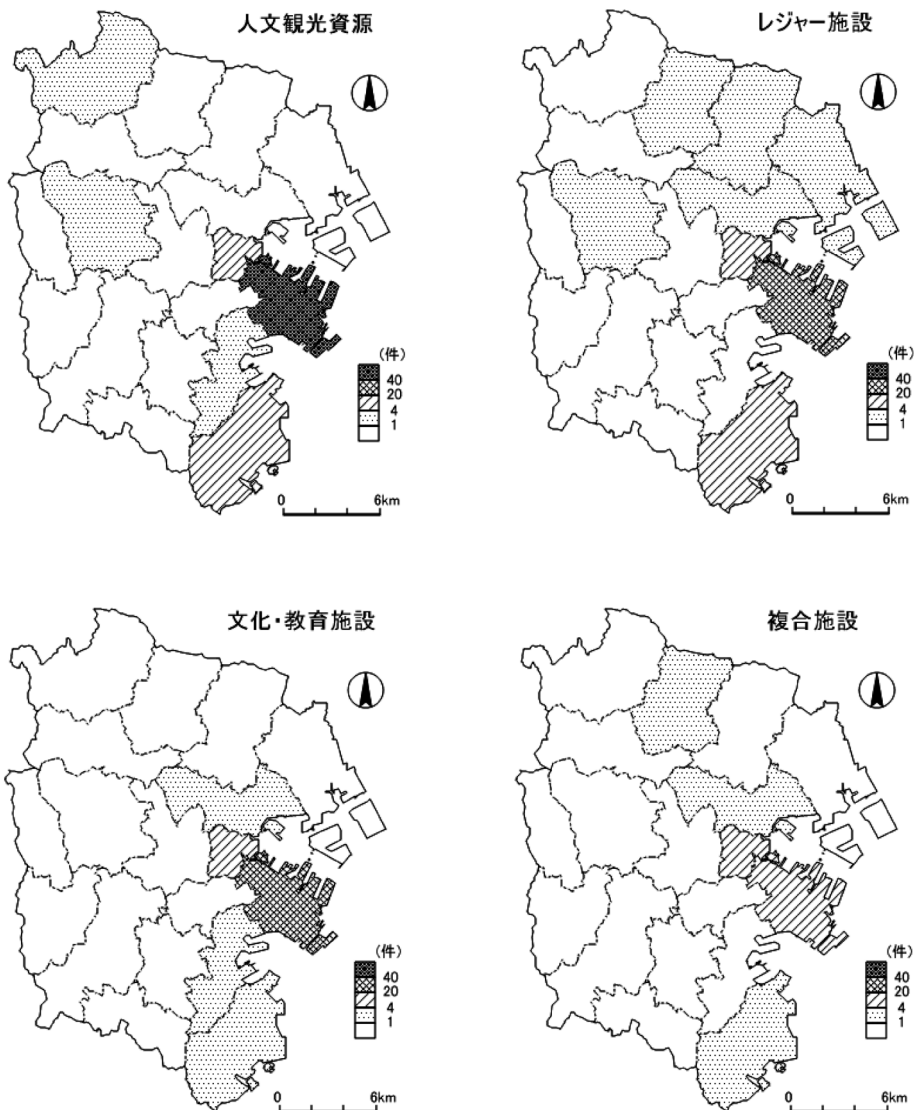


図7 ガイドブックにおける観光資源・施設（大分類）の各区別掲載件数（その1）
（各ガイドブックにより作成）

も含め、市中心部から臨海部南部までの一帯と、内陸部の青葉区、旭区に分布する。「横浜観光情報」と比べると、内陸部の2区は一致するが、臨海部は鶴見区と磯子区が異なる。磯子区が入った結果、ガイドブックでは臨海部に連担がみられる。

大分類「レジャー施設」は8区に分布する。中区に51件中22件（43.1%）、西区に16件（31.4%）あり、2区で38件、74.5%を占める。「人文観光資源」ほど、この2区に集中していないことがわかる。「横浜観光情報」と分布状況は類似している。

大分類「文化・教育施設」は5区に分布する。中区に38件中23件（60.5%）、西区に12件（31.6%）あり、2区で35件、92.1%を占める。この2区への集中が指摘できる。空間的には、神奈川区を含む市中心部から臨海部南部までの一帯のみである。10区に分布し広域的であった「横浜観光情報」とは大きく異なる。

大分類「複合施設」は5区に分布する。西区に31件中16件（51.6%）、中区に9件（29.0%）、神奈川区に3件（9.7%）あり、3区で28件、

90.3%を占める。ほかは、市中心部から離れた金沢区（2件）と都筑区（1件）に分布する。

図8は、大分類のうち「飲食施設」、「物品販売施設」それぞれの掲載件数を、区別に階層的に示したものである。

大分類「飲食施設」は6区に分布する。中区に512件中367件（71.7%）、西区に119件（23.2%）あり、2区で486件、94.9%を占める。この2区にかなり集中していることがわかる。その他、神奈川区に21件（4.1%）あり、「飲食施設」のほぼすべてがこの3区に分布する。

大分類「物品販売施設」は5区に分布する。中区に155件中94件（60.6%）、西区に53件（34.2%）あり、2区で147件、94.8%を占める。その他、金沢区に6件（3.9%）ある。

図9は、大分類のうち「宿泊施設」の掲載件数を、区別に階層的に示したものである。「宿泊施設」は4区に分布する。中区に30件中20件（66.7%）、西区に8件（26.7%）あり、2区で28件、93.3%を占める。空間的にはこの2区から神奈川区、港北区に連担している。港北区には新幹線停車駅の新横浜駅があり、実際は「宿

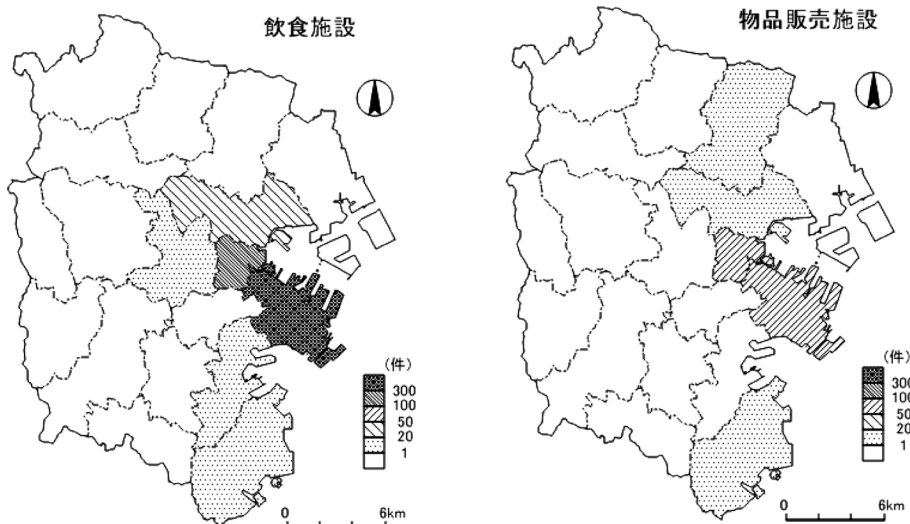


図8 ガイドブックにおける観光資源・施設（大分類）の各区別掲載件数（その2）
（各ガイドブックにより作成）

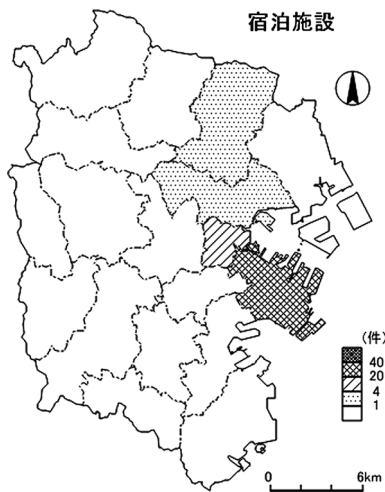


図9 ガイドブックにおける観光資源・施設（大分類）の各区分別掲載件数（その3）
（各ガイドブックにより作成）

泊施設」が多く分布しているが、ガイドブックへの掲載件数は少ない。

2. 観光資源・施設の中分類と空間的分布

本節では、ガイドブックにおける観光資源・施設の中分類別掲載件数と空間的分布を検討する。表6は、878件の観光資源・施設の中分類別掲載件数とその割合を示したものである。

まず、大分類で512件、58.3%を占める「飲食施設」では、中分類「食事」が284件（観光資源・施設全体の32.3%）と多い。表7によって「食事」の小分類別内訳を確認すると、「中華料理」が284件中88件、31.0%を占める。2位以下とは2.5倍以上の差がある。中華街があるだけに、やはり「中華料理」が「食事」の中心的な観光資源・施設であることがわかる。「中華料理」以外にも「イタリアン」や「フレンチ」というエスニックな料理があり、また小分類「他専門料理」にもさまざまな国・民族の料理を提供する店舗が多く含まれている。ただし、このことを横浜のガイドブックの特徴と指摘するためには、他地域との比較が必要である。「日本料理」をはじめとするいわゆる和食

表6 ガイドブックにおける観光資源・施設の中分類別掲載件数

大分類	中分類	件	(%)
飲食施設	食事	284	32.3
	カフェ	152	17.3
	テイクアウト	56	6.4
	バー	12	1.4
	飲食店街・フードコート	8	0.9
物品販売施設	衣料・雑貨類販売	108	12.3
	飲食料品販売	47	5.4
人文観光資源	公園・庭園	26	3.0
	建造物	17	1.9
	宗教施設	9	1.0
	土木・モニュメント	7	0.8
レジャー施設	エンタメ施設	27	3.1
	スポーツ施設	5	0.6
	温浴施設	5	0.6
	遊園地・テーマパーク	5	0.6
	リラクゼーション	4	0.5
	動物園・植物園	3	0.3
	工場見学	2	0.2
文化・教育施設	博物館・美術館	29	3.3
	文化施設	9	1.0
複合施設	複合商業施設	31	3.5
宿泊施設	宿泊施設	30	3.4
その他	観光案内施設	1	0.1
	コンベンション施設	1	0.1
計		878	100.0

（各ガイドブックにより作成）

の割合は高くない。これらのうち数件は、旧東海道の神奈川宿付近にみられる。

大分類「飲食施設」では、そのほかに中分類「カフェ」が152件ある。観光資源・施設全体の17.3%を占め、「食事」に次いで高い割合となっている。歴史のあるカフェのほか、インスタ映えするカフェも掲載されている。景色のよいカフェの掲載もあるが、これは「食事」の店舗も同様の傾向にある。

大分類「物品販売施設」の中分類では、「衣

表7 ガイドブックにおける「食事」の小分類別掲載件数

小分類	件	(%)
中華料理	88	31.0
レストラン	33	11.6
イタリアン	32	11.3
酒場	24	8.5
フレンチ	20	7.0
洋食	14	4.9
日本料理	12	4.2
ラーメン店	10	3.5
料亭	1	0.4
焼肉店	1	0.4
他専門料理	43	15.1
他飲食店	6	2.1
計	284	100.0

（各ガイドブックにより作成）

料・雑貨類販売」が108件と多く、観光資源・施設全体では3位の12.3%を占める。これには土産物もあるが、日常の商業空間における衣

料・雑貨などの店舗も含まれる。ショッピングという行為が横浜の観光行動の一つを構成しているといえるであろう。

大分類「人文観光資源」のなかでは、中分類「公園・庭園」が26件と最も多い。横浜三塔や洋館などの中分類「建造物」17件は、すべて中区に分布する。「土木・モニュメント」7件のうち6件も、中区に位置する。これらは横浜の近代化を表象する観光資源が多い。

ところで、表8に示したように、中分類「公園・庭園」の掲載状況を「横浜観光情報」とガイドブックとで比較すると、両方に掲載されているものが全32件中13件、「横浜観光情報」にのみ掲載が6件、ガイドブックにのみ掲載が13件である。「横浜観光情報」にのみ掲載の施設は金沢区・鶴見区などに位置し、ガイドブックにのみ掲載の施設は中区と西区にある。同様に、中分類「宗教施設」の掲載状況を示した表9によると、「横浜観光情報」にのみ掲載の施設は鶴見区（總持寺）に位置し、ガイドブックにのみ掲載の施設は中区（キリスト教会）、西区（仏教寺院）、金沢区、磯子区（どちらも神

表8 「横浜観光情報」とガイドブックにおける「公園・庭園」の区別掲載件数

	中区	西区	金沢区	鶴見区	磯子区	旭区	計
両方	7	2	2	0	1	1	13
「横浜観光情報」のみ	1	1	2	2	0	0	6
ガイドブックのみ	10	3	0	0	0	0	13
計	18	6	4	2	1	1	32

（「横浜観光情報」と各ガイドブックにより作成）

表9 「横浜観光情報」とガイドブックにおける「宗教施設」の区別掲載件数

	中区	西区	金沢区	鶴見区	磯子区	計
両方	2	1	1	0	0	4
「横浜観光情報」のみ	0	0	0	1	0	1
ガイドブックのみ	2	1	1	0	1	5
計	4	2	2	1	1	10

（「横浜観光情報」と各ガイドブックにより作成）

社)にある。このように、「横浜観光情報」とガイドブックとで掲載状況が異なるものの位置に着目すると、ガイドブックは中区と西区の施設を重点的に掲載していることが特徴的であり、それに比べて「横浜観光情報」は郊外の施設の掲載が相対的に多い。

大分類「レジャー施設」では、中分類「エンタメ施設」が27件で最も多い。「エンタメ施設」は、占いやレンタル衣装と写真撮影、体験型施設などで構成される。中区山下町の中華街に多く分布する。また、西区の複合施設に体験型施設の分布がみられる。図7でみたように、大分類「レジャー施設」は横浜市内各区に比較的分散しているが、それは中分類「スポーツ施設」、「温浴施設」、「遊園地・テーマパーク」、「動物園・植物園」、「工場見学」に顕著である。

大分類「文化・教育施設」では、中分類「博

物館・美術館」が29件と多い。このうち、中区と西区に位置するものが26件である。中分類「文化施設」も9件すべてが中区か西区にある。

3. 観光資源・施設の掲載頻度

本節と次節では、観光資源・施設のガイドブック掲載頻度の点から分析を行う。掲載頻度は、6冊のガイドブックのうち5冊以上に掲載されているものを高頻度、3~4冊を中頻度、1~2冊を低頻度と分類する。なお、掲載頻度を分析した既往研究として、鈴木(2010)は、ガイドブックではないが、観光地で入手した11枚の案内図の観光地点について、その掲載頻度を地図化している。

高頻度に分類される観光資源・施設は69件であり、878件全体の7.9%にすぎない。表10

表10 ガイドブックに高頻度で掲載された観光資源・施設

大分類	中分類	観光資源・観光施設の名称(もしくは小分類)
飲食施設	食事	レストラン(6)、中華料理(3)、フレンチ(2)、イタリアン、他専門料理
	カフェ	カフェ(5)
	バー	バー
	テイクアウト	洋菓子店
物品販売施設	飲食料品販売	ベーカリー(2)
	衣料・雑貨等販売	雑貨みやげ(2)、靴、カジュアルウエア、洋服、レース店、ジュエリー、ペーパー雑貨、雑貨
人文観光資源	建造物	横浜市開港記念会館(ジャックの塔)、横浜税関(クイーンの塔)、神奈川県庁本庁舎(キングの塔)、外交官の家、ベリック・ホール、山手111番館、エリスマン邸、プラフ18番館、横浜スイギリス館、山手234番館
	公園・庭園	山下公園、港の見える丘公園、象の鼻パーク、三溪園
	宗教施設	横浜関帝廟、横濱媽祖廟
	土木・モニュメント	横浜港大さん橋国際客船ターミナル、横浜ランドマークタワースカイガーデン、横浜マリンタワー
レジャー施設	遊園地・テーマパーク	水族館・アトラクション、遊園地
	温浴施設	温浴施設(2)
	スポーツ施設	野球場
文化・教育施設	博物館・美術館	神奈川県立歴史博物館、横浜開港資料館、日本郵船歴史博物館、日本郵船氷川丸、ミュージアム
複合施設	複合商業施設	横浜赤レンガ倉庫、横浜ワールドポーターズ、横浜ランドマークタワー、MARK IS みなとみらい
宿泊施設	宿泊施設	横浜グランドインターコンチネンタルホテル、横浜ベイホテル東急、ホテルニューグランド、ニューオータニ横浜プレミアム、横浜ロイヤルパークホテル

下線：商業色の強い観光施設については、名称をそのまま掲載することを避け、小分類で表記した。

(数字)：カッコ内の数字は、小分類に含まれる観光資源・施設数を表す。

(各ガイドブックにより作成)

は、高頻度で掲載された観光資源・施設をリスト化したものである¹³⁾。これらを横浜市の代表的な観光資源・施設ということができよう。大分類「飲食施設」の中分類「食事」では、小分類「中華料理」より「レストラン」の店舗数が多い。前節で述べたように、小分類の掲載件数自体は「中華料理」の方が多いが（表7）、特定の同じ店が繰り返し紹介されることは少ないといえる。「中華料理」や「レストラン」などにおいて高頻度で掲載されているのは老舗の飲食店である。「食事」に次いで数の多い中分類「カフェ」は、老舗の店舗と中華街の店舗で構成されている。大分類「物品販売施設」では、地元で有名なベーカリーや老舗が中心となっている¹⁴⁾。大分類「人文観光施設」については、中分類「公園・庭園」より「建造物」の掲載頻度が高い。

4. 横浜中心部における掲載頻度別の分布

本節では、横浜駅周辺から山手までのスケール（横浜中心部）における観光資源・施設の分布を、ガイドブックへの掲載頻度別に検討する¹⁵⁾。図10は、高頻度で掲載されている観光資源・施設について、横浜中心部における分布を示したものである。主たる観光対象と考えられる「人文観光資源」、「文化・教育施設」、「レジャー施設」を赤で、補助的施設のうち「飲食施設」、「物品販売施設」、「複合施設」を青で、「宿泊施設」を緑で着色している。

大分類「飲食施設」と「物品販売施設」は各観光地区にあるものの、「飲食施設」は元町から中華街にかけて、「物品販売施設」は元町に比較的多く分布している。元町は古くからある有名な商店街であることが反映されていよう。

大分類「人文観光施設」は、日本大通り付近

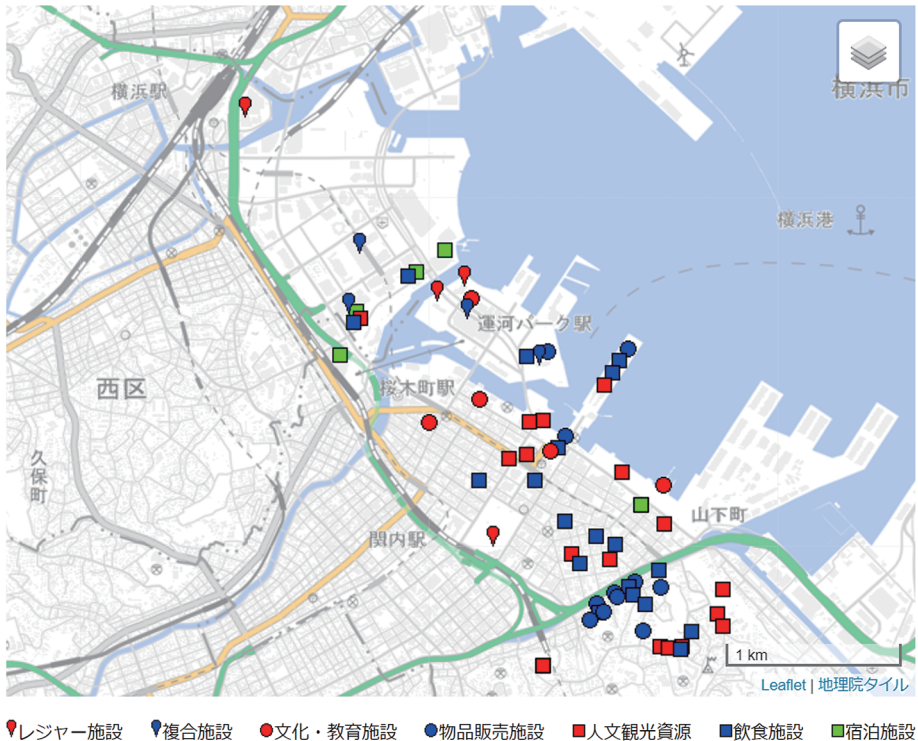


図10 横浜中心部におけるガイドブック高頻度の観光資源・施設の分布
地点が重なる記号については、支障ない程度で移動させたものもある。
（各ガイドブックにより作成）

と山手に多くみられる。中分類「建造物」では横浜三塔のほか、山手の洋館が高頻度で掲載されている。「公園・庭園」では山下公園、港の見える丘公園と、近年整備された象の鼻パークの3件が頻出である。「土木・モニュメント」では、3件のうち2件がタワーである。眺望と観光の関連性がうかがえる。

大分類「レジャー施設」は4件あるが、集中はしていない。横浜駅周辺とみなとみらいにある「温浴施設」のほか、関内の横浜スタジアム、みなとみらいのコスモワールドの4件である。

大分類「文化・教育施設」は中分類の「博物館・美術館」のみであり、5件中4件が山下公園・関内・馬車道地区に位置している。また、大分類「複合施設」は4件すべてみなとみらいに位置する。「宿泊施設」は、歴史のあるホテルニューグランドを除くと、ほかの4件はすべ

てみなとみらいに位置している。あくまで高頻度に限定した条件つきではあるが、大分類の観光資源・施設ごとに分布の偏在性を指摘できよう。

図11は、中頻度の観光資源・施設について、横浜中心部における分布を示したものである。図10と比べると、全体として件数が増えており、空間的には横浜駅周辺や野毛への拡大がみられる。大分類「飲食施設」は件数増加の主要因であるが、とくに中華街への集中が確認できる。山手や元町、大さん橋入り口付近、横浜駅周辺にも集中がみられる。「物品販売施設」はやはり元町に多い。また、みなとみらいに「文化・教育施設」が4件かたまっている。横浜駅周辺に「複合施設」が集まっていることも指摘できる。

図12は、図10、図11と同様、低頻度の観光資源・施設の分布を示したものである。総数と

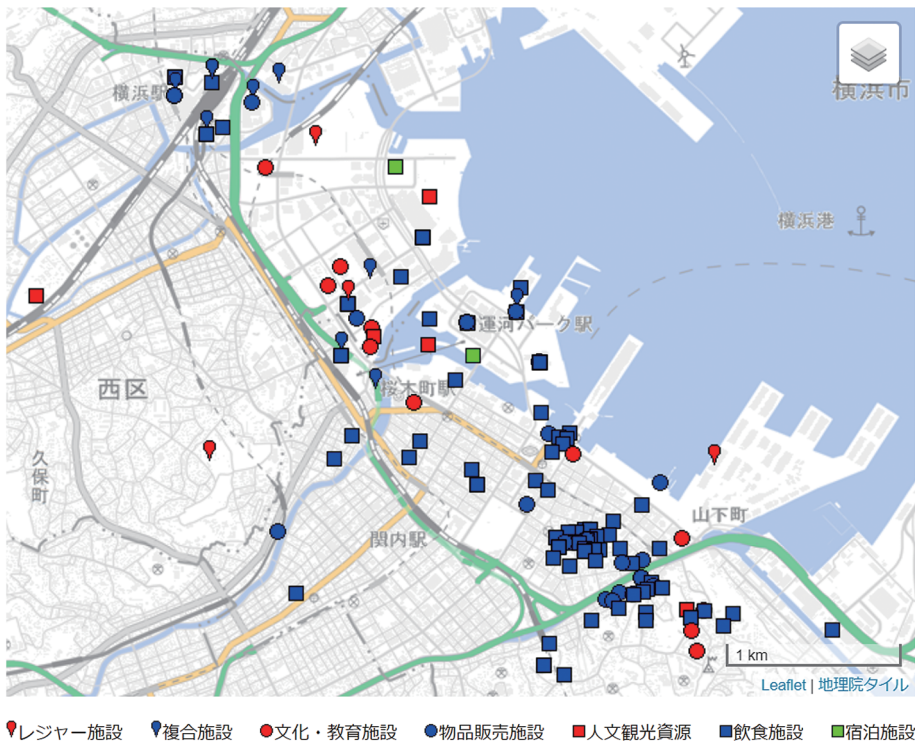


図11 横浜中心部におけるガイドブック中頻度の観光資源・施設の分布
(各ガイドブックにより作成)

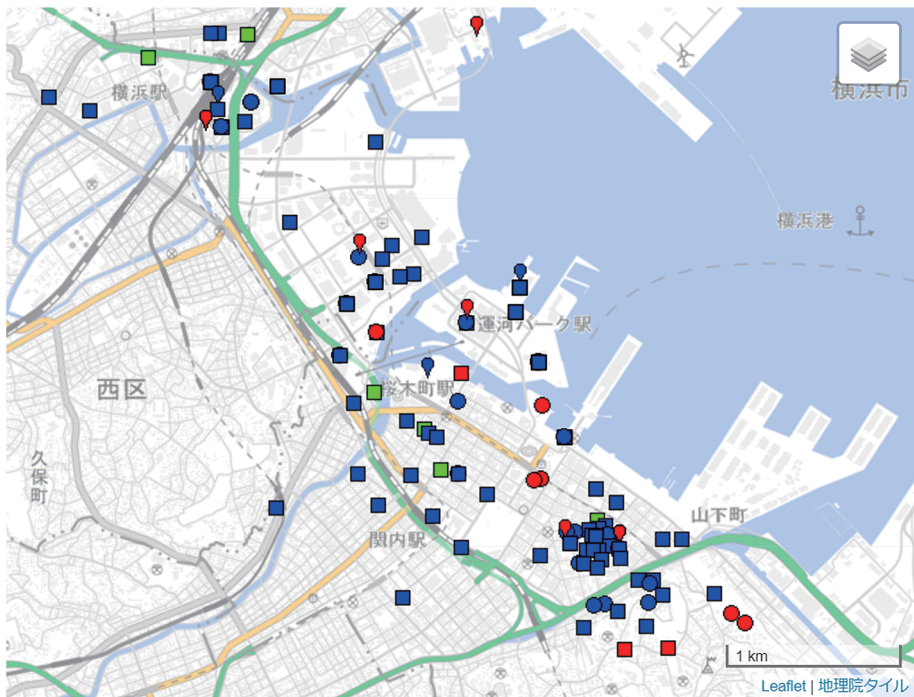


図12 横浜中心部におけるガイドブック低頻度の観光資源・施設の分布
(各ガイドブックにより作成)

しては、図11とあまり違いがない。横浜駅周辺では、分布の空間的拡大がみられる。大分類「飲食施設」は相変わらず中華街に集中しているが、みなとみらいや馬車道、関内の件数が増えている。

5. 二つのスケールにおける横浜市の観光空間

本節では、本章で検討してきた、ガイドブックにおける横浜市の観光空間を、二つのスケールで再整理する。

1) 横浜市のスケール

まず横浜市全域のスケールで、これを18区別に分析する。本章1節で明らかになったように、ガイドブックに掲載された観光資源・施設は中区、次いで西区に著しく集中している。この2区合計の割合の高い順に大分類を列挙すると、「飲食施設」は94.9%、「物品販売施設」は94.8%、「宿泊施設」は93.3%、「文化・教育施設」

は92.1%、「人文観光資源」は88.1%、「複合施設」は80.6%、「レジャー施設」は74.5%である。観光資源・施設のうちとくに補助的施設の集中が顕著であることがわかる。

図13では、ガイドブックに掲載されている各区の観光資源・施設が七つの大分類中いくつに該当するか（出現数）を示している。中区と西区はすべての大分類が掲載されており、神奈川区と金沢区は6種類に該当する。区によって観光資源・施設数は大きく違うものの、この4区はほとんどすべてのジャンルがそろっており、横浜市の観光空間の中心であるといえよう。大分類が3種類ある港北区と磯子区がこれらに続く。面的広がりを説明するならば、金沢区から神奈川区まで続く臨海部の南北の延長上に、港北区、都筑区等の内陸部が連担している。一方、旭区を除く西部においては、ガイドブックのうえでは観光資源・施設がみられな

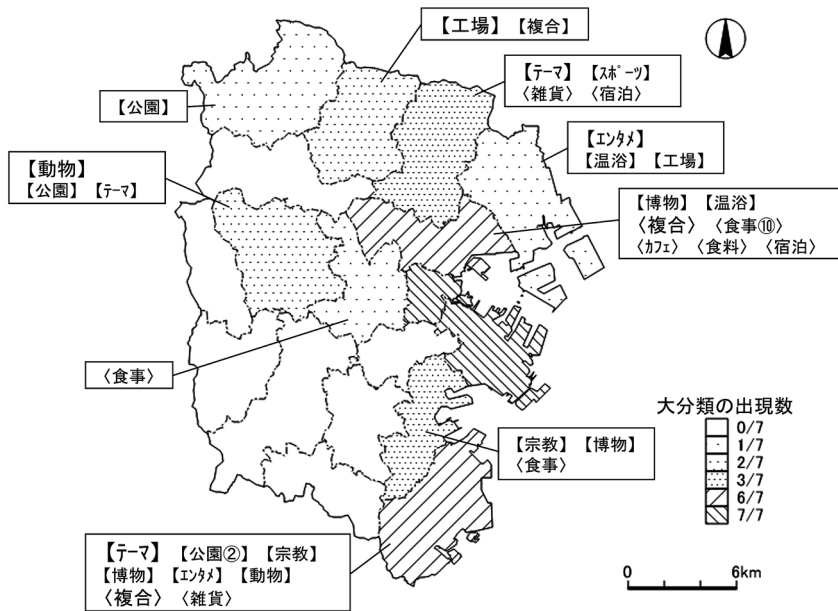


図13 ガイドブックにみる横浜市の観光空間

字の大きさはガイドブック掲載頻度に対応している。

【観光の主たる対象】〈観光の補助的施設〉では中分類を略記している。

(各ガイドブックにより作成)

い。

図13では、中区と西区以外の周辺部の区について、観光資源・施設の中分類を記した。周辺部では、「公園・庭園」（とくに公園）、「動物園・植物園」（とくに動物園）、「スポーツ施設」、「工場見学」といった敷地の広さが必要となるものの分布が特徴といえる。

2) 横浜中心部のスケール

図14は、図10から図12によって検討した、横浜駅周辺から山手までの一帯（横浜中心部）における観光資源・施設の分布を、模式的に示したものである。前節では掲載頻度別に観光資源・施設の分布を分析したが、本節では横浜中心部を地区ごとに再整理する。

横浜駅周辺は、中頻度から低頻度の「飲食施設」、「物品販売施設」、「複合施設」がみられる。横浜駅前には長期間にわたって駅ビルなどの工事が進められていることで知られているが、近年は開業した施設も多く、ガイドブックでも

取り上げられている。

みなとみらいの中央地区では、桜木町駅からランドマークプラザを通り、パシフィコ横浜に至るクイーン軸とその周辺に、高頻度の「宿泊施設」のほか、中頻度の「文化・教育施設」、低頻度の「飲食施設」がみられる。「宿泊施設」は高層の建物に位置し、港の眺望が得られる立地にある。「文化・教育施設」には横浜美術館が含まれる。「飲食施設」は、ここ以外に新港地区の赤レンガ倉庫とその周辺にも中頻度、低頻度で位置する。新港地区の観光資源・施設には、テナントビルの新規開業によるガイドブック掲載がみられる。中央地区の観光資源・施設は複数の大分類からなるのに対し、新港地区は「飲食施設」が中心であるといえる。

馬車道・関内・山下公園一帯は、高頻度の「建造物」、中頻度の「飲食施設」、低頻度の「飲食施設」や「宿泊施設」がみられる。高頻度の「建造物」は、横浜の近代を表象する歴史的な



図14 ガイドブックにみる横浜中心部の観光空間

楕円の枠線の太さと線種は、ガイドブック掲載頻度（高・中・低）に対応している。
（各ガイドブックにより地理院地図Vectorに加筆して作成）

観光資源である。関内は中心業務地区であるので、中頻度や低頻度の「飲食施設」の分布はその影響が考えられる。低頻度の「宿泊施設」は、近年開業したホテルが含まれる。図2をみると、横浜市は日帰り観光客の比率が高い。しかし、近年、横浜中心部においてホテルの新規開業が続いており、この傾向はしばらく続くと思込まれる¹⁶⁾。

中華街は、中頻度、低頻度の「飲食施設」、「物品販売施設」がみられる。高頻度よりも中頻度、低頻度が中心となるのは、店舗数が多いこともあって、上述のように、ガイドブックによって掲載される店が違ってくるためであろう。

元町・山手は、山手に高頻度の「建造物」、元町に高頻度の「物品販売施設」、元町から山手にかけて中頻度や低頻度の「飲食施設」がみられる。元町は横浜中心部を代表するハイセンスな商店街と位置づけられており、ガイドブックへの店舗掲載も多い。山手は、洋館の「建造

物」とそれを利用した「文化・教育施設」や「飲食施設」もみられる。

ガイドブックでは「人文観光資源」を中心として各地区の概要が記載されているが、本研究では、それ以外にも観光資源・施設の空間的な分布の特徴や各地区の特色を横浜中心部の局地的スケールで見出すことができた。

6. 観光利用の交通機関

本節では、ここまで触れてこなかったが、とくに水上を中心として、観光用に利用されている交通機関について検討する。これらは「観光資源・施設」と呼んでもいいものである。表11は、ガイドブックに掲載されている観光利用の交通機関の種類・件数とガイドブック掲載冊数、1件あたりの平均掲載冊数を示したものである。海からの眺望や食事を楽しめる港内クルーズや、海を眺めながら沿岸部を移動できる水上バスのように海に関するものの掲載が多い。港内クルーズはコースの種類も多く、6冊

表11 ガイドブックにおける観光利用の交通機関の掲載状況

中分類	件数	掲載冊数	平均掲載冊数
港内クルーズ	8	6	2.5
水上バス	2	4	2.5
ロープウェイ	1	3	3.0
大型客船クルーズ（発着）	3	3	2.0
路線バス・周遊バス	2	2	2.0
水陸両用バス	2	2	1.0
セグウェイツアー	1	1	1.0
ヘリコプターツアー	1	1	1.0
計	20		1.9

（各ガイドブックにより作成）

のガイドブックすべてにいずれかのコースが掲載されている。2021年に開業した「YOKOHAMA AIR CABIN（ヨコハマエアキャビン）」というロープウェイの掲載率も高い。

その他、数は少ないが、水陸両用バスや2階建てオープンバス、ヘリコプターツアー、近年始まったセグウェイツアーの掲載もみられる。

V. おわりに

本研究で得られた知見は以下のようにまとめられる。

1) 公的機関による「横浜観光情報」と民間出版社の6冊のガイドブックに掲載されている観光資源・施設を比較すると、前者は「文化・教育施設」、「人文観光資源」、「レジャー施設」、「複合施設」の割合が高いのに対し、後者は「飲食施設」、「物品販売施設」の割合が高い。補助的施設の多い都市観光の全体を把握するためには、後者の方が適しているといえる。

2) 「横浜観光情報」とガイドブックの両者に共通して、中区、次いで西区に観光資源・施設の集中がみられる。逆に、内陸部、とくに西部は少なく、緑区、瀬谷区、泉区、戸塚区、港南区には観光資源・施設がない。このような空間的な偏在が生じている。

3) ガイドブックに掲載された観光資源・施設の空間的分布は、大分類別に以下のとおりである。「人文観光資源」は、市中心部から臨海部南部4区に連担がみられ、ほかに内陸2区の計6区に分布する。「レジャー施設」は8区に分布する。東部に比較的偏っているが、中区、西区への集中は他の大分類に比べると低めである。「文化・教育施設」は、市中心部から臨海部南部の5区に連担している。「横浜観光情報」では10区に広がっており、二者に顕著な相違がみられる。「複合施設」は5区に分布するが、神奈川区を加えた市中心部3区に9割が集まっており、ほかは2区に離れて分布する。「飲食施設」は6区に分布するものの、件数に注目すると、中区、西区、神奈川区の市中心部3区への集中が顕著である。「物品販売施設」と「宿泊施設」も、中区、西区に9割以上が集中している。「宿泊施設」は、横浜駅周辺の一部を含む神奈川区、新横浜駅周辺を含む港北区に連担している。

4) ガイドブックの中分類別掲載件数をみると、大分類「飲食施設」では中分類「食事」が多い。そのなかでは小分類「中華料理」が約3分の1を占めるが、ほかの国・民族の料理も多く含まれている。大分類「飲食施設」では中分類「カフェ」も上位にあり、老舗からインスタ

映える店舗まで多様な側面から掲載されている。大分類「物品販売施設」では中分類「衣料・雑貨類販売」が上位にあり、都市観光の一側面としてショッピングが指摘できよう。大分類「人文観光資源」では中分類「公園・庭園」が多い。大分類「レジャー施設」は中分類「エンタメ施設」が中華街に集中し、「スポーツ施設」、「遊園地・テーマパーク」などの施設は市内各区に分散傾向にある。大分類「文化・教育施設」では中分類「博物館・美術館」が多い。

5) 6冊のガイドブックに高頻度で掲載されているのは、飲食店では老舗である。「人文観光資源」では建造物の掲載率が高い。

6) 横浜市全域の観光空間を18区別に分析すると、掲載件数では中区、西区に極端に集中しているが、大分類の種類の多さに鑑みれば、神奈川区と金沢区を含めた4区が観光空間の中心と位置づけられよう。周辺部では、敷地の広さが必要となる観光資源・施設の分布が特徴的である。また、旭区を除く西部にはガイドブックのうえでは観光資源・施設がない。

7) 横浜中心部の観光空間としての特徴を地区別に記すと、横浜駅周辺は、中・低頻度の「飲食施設」、「物品販売施設」からなる。みなとみらいの中央地区は、高頻度の「宿泊施設」、中頻度の「文化・教育施設」、低頻度の「飲食施設」のように複数の大分類施設からなり、一方新港地区は中・低頻度の「飲食施設」が中心である。馬車道・関内・山下公園一帯は、高頻度の「建造物」、中・低頻度の「飲食施設」、低頻度の「宿泊施設」からなる。中華街は中・低頻度の「飲食施設」、「物品販売施設」がみられる。元町・山手は山手に高頻度の「建造物」、元町に高頻度の「物品販売施設」、元町から山手にかけて中・低頻度の「飲食施設」がある。

8) ガイドブックには観光利用の交通機関も掲載されている。横浜港内のクルーズや水上バスなど船に乗るものが多いが、開業したばかり

のロープウェイの掲載率も高い。

本研究では横浜市域の観光資源・施設を区別に分析することで、これまであまり注目されてこなかった、港町横浜のイメージ¹⁷⁾とは必ずしもそぐわない内陸部、もしくは周辺部を含めた横浜市全域の観光空間としての特徴を明らかにした。また、観光の中心となる横浜駅周辺から山手の一帯（横浜中心部）の局地的スケールにおいて、観光資源・施設ごとの分布の違いや各地区の特色を見出すことができた。とくに掲載頻度を用いることで階層的に分析することができた。これらが、ガイドブックに掲載されている、「人文観光資源」を中心とした各地区の概要説明とは差異化される点であろう。

本研究ではガイドブックをテキストとし、二つのスケールで横浜市の観光空間を分析した。地域、空間、場所をマルチスケールで研究するという伝統的な地理学方法論は、学際的な観光学分野に対する地理学からのアプローチとしてきわめて有効であると考ええる。他の学問分野と差別化できる地理学らしい手法として積極的に活用すべきであろう。

本研究では、横浜市の観光空間の特性を考察するにあたり、観光資源・施設の分類にとどまらず、その分布を区別・地区別に整理する空間的分析を試みた。研究の主目的から外れるが、本研究では初心者でも操作しやすいGISソフトMANDARAやジオコーディングを用いることによって、2022年度から高等学校において「地理総合」が始動する教育現場での活用方法を提示できたと考えている。本研究は、この方法提示を副次的な目的として含意していることを記しておく。

注

- 1) なお、観光資源と観光施設という用語の指す内容については、溝尾（2009）に詳しいが、分類方法が定まっているわけではな

- い。本研究では、観光資源や観光施設を大分類・中分類・小分類に区分するため、大分類のさらに上位にあたる観光資源や観光施設という分類は用いず、「観光資源・施設」と一括りで表現する。
- 2) 近年では、SNSや口コミサイトなどインターネット上にある観光情報の収集がさかんに行われている。とくに観光行動の分析といった研究分野においては、このようなメディアを分析対象とすることが重要であろう。しかしながら、本研究のように場所の理解の一助として観光に関する何らかのメディアを対象とすると、松山（2012）がいうガイドブックの「一覧性・網羅性にすぐれ」という指摘は、ガイドブック分析の有用な点を示している。ちなみにSNSの情報を入手する際には、何らかの検索ワード（たとえばハッシュタグを用いる等）が必要となろう。筆者は予備調査段階で「地名」を入力してSNSの検索を行ったことがあるが、観光に関する写真や記述よりも日常に関する写真や記述の方が圧倒的に多く表示された。いずれにせよ、今後の課題としたい。
 - 3) 文化観光局観光振興課：横浜市記者発表資料（令和3年5月14日）。https://www.city.yokohama.lg.jp/kanko-bunka/miryoku/data/chosa_gaiyo.files/0038_20210512.pdf（最終閲覧日2022年1月19日）
 - 4) 公益財団法人横浜観光コンベンション・ビューロー：横浜観光情報＞横浜の観光スポット。<https://www.welcome.city.yokohama.jp/spot/>（最終閲覧日2021年9月10日）
 - 5) 本研究では、名称と所在地の両方が書かれているものを対象とした。そのため、所在地が記載されていないものや地図上にのみ示されたものは分析対象としていない。また、ガイドブック1冊に掲載されていた商店街については、所在地が一か所に定まらないため、分析対象から外した。
 - 6) 住居表示の町名「みなとみらい」は西区に位置するが、「みなとみらい21地区」開発事業では、「みなとみらい21地区」は中区の新港地区と西区の中央地区、横浜駅東口地区（1街区のみ）に区分されている。本研究では、中区と西区にまたがる、開発事業の新港地区と中央地区をまとめて「みなとみらい」と表現する。
 - 7) 公益財団法人横浜観光コンベンション・ビューロー：組織概要。<https://business.yokohamajapan.com/ja/organization/>（最終閲覧日2022年1月30日）
 - 8) ただし、都市観光ではない、規模の小さな観光地であれば、観光協会などの公的機関がすべての「飲食施設」、「物品販売施設」の情報を公開していることも考えられる。
 - 9) 昭文社（2021）と同じシリーズの『まっぷる 横浜さんぽ地図 mini』（昭文社2019c）でも、横浜市域だけでなく、川崎まで含まれている。
 - 10) この施設の中分類については、「動物園・植物園」に分類することも検討したが、アトラクションやレストラン、ホテルを有していることから「遊園地・テーマパーク」とした。
 - 11) 博物館やミュージアムという名称が用いられている施設のうち、施設の性格上、「博物館・美術館」に分類せず、それ以外の中分類にしたものもある。この施設のほか、たとえば新横浜ラーメン博物館は「遊園地・テーマパーク」に分類した。
 - 12) 合計の割合は件数の合計値で算出し、小数第2位を四捨五入している。以下も同様である。
 - 13) 「横浜ランドマークタワー」は、ガイドブックでは「ランドマークプラザ」やホテ

- ルなどを含む「複合施設」と表現されることが多い。「横浜ランドマークタワースカイガーデン」には店舗があり、店舗名も掲載されているので、それぞれの店舗を「飲食施設」「物品販売施設」に分類した。「横浜ランドマークタワースカイガーデン」自体のガイドブックにおける主たる記述内容は「眺望地点」と読み取り、ここでは中分類の「土木・モニュメント」とした。
- 14) 老舗の掲載については、過去のガイドブックでも同じか関心がもたれる。今後の課題としたい。
- 15) ここでの分析に用いた図10～図12と図3の作成には、埼玉大学教育学部の谷謙二研究室HPにあるGeocoding and Mappingを使用した。<https://ktgis.net/gcode/geocoding.html>
- 16) 代表的な宿泊施設として、みなとみらいのインターコンチネンタル横浜Pier 8（2019年開業）や、山下町のハイアットリージェンシー横浜、みなとみらいのザ・カハラ・ホテル&リゾート横浜、馬車道付近（北仲地区）のオークウッドスイーツ横浜（以上、2020年開業）などがあり、2022年にもみなとみらいにウェスティンホテル横浜が開業予定である。
- 17) I章では観光資源・施設を中心に既往研究の整理を行ったので触れなかったが、堀野（2002）は、1999年から2001年までに発行された6冊の横浜のガイドブックを用いて、キャッチコピーと地区の概説的な記述を分析し、横浜の港町イメージと実態の乖離を考察している。
- 浮田典良・伏見能成 1999. 新旧ガイドブックを通じてみた河内の「名所」. 歴史地理学 41-2: 23-34.
- 内田順文 1998. 中部地方における都市のイメージについて—観光パンフレットを用いた場所イメージの定量的分析の試み—. 国士舘大学文学部人文学会紀要31: 69-82.
- 内田順文 2004. 中国・四国・九州地方における都市の観光イメージについて—観光パンフレットを用いた場所イメージの定量的分析の試み—. 国士舘大学地理学報告13: 1-16.
- 鍵村香澄・中井 祐 2016. 明治から現代の箱根の観光ガイドブックにみる風景記述の変化とその特徴. 景観・デザイン研究講演集12: 194-199.
- 河本大地・金子綾香 2014. 英文ガイドブック『Lonely Planet Japan』における関西地方の取り扱いとその変化—2000年版と2013年版を対象として—. 兵庫地理59: 29-37.
- 今野理文・十代田朗・羽生冬佳 2002. 観光ガイドブックにみる観光地のアピールポイントの変遷. 観光研究14-1: 9-16.
- JTBパブリッシング 2019. 『横浜 中華街 改訂5版』（ココミル）JTBパブリッシング.
- JTBパブリッシング 2021. 『るるぶ横浜 中華街 みなとみらい 超ちいサイズ'22』JTBパブリッシング.
- 澁谷鎮明 2011. 韓国のガイドブックにみる日本の観光空間—「核心日本」と「先進都市東京」—. 貿易風（中部大学国際関係学部論集）6: 77-96.
- 澁谷鎮明 2012. 韓国のガイドブックに見る東京の観光空間—『ドラマイン東京』・『マニアック東京』の特別な場所—. 貿易風（中部大学国際関係学部論集）7: 105-125.
- 澁谷鎮明 2018. 観光ガイドブックに見る日本人の韓国旅行とその変化—1970～1990年代を中心に—. 日本観光研究学会全国大会学術

参考文献

- 有馬貴之 2015. 旅行ガイドブックにみる富士山観光のイメージ変化—『るるぶ富士山』の目次を対象としたテキスト分析—. 地学雑誌 124: 1033-1045.

- 論文集33: 189-192.
- 昭文社 2019a. 『横浜 3版3刷』(ことりっ
ぷ) 昭文社.
- 昭文社 2019b. 『横浜』(COLOR + PLUS) 昭
文社.
- 昭文社 2019c. 『横浜さんぽ地図 mini』(まっ
ぶるマガジン) 昭文社.
- 昭文社 2021. 『横浜 中華街・みなとみらい
mini'22』(まっぶるマガジン) 昭文社.
- 鈴木晃志郎 2010. 観光案内図の掲載地点から
みた麁の浦の観光空間. 日本観光研究学会全
国大会学術論文集25: 161-164.
- 鈴木晃志郎・若林芳樹 2008. 日本と英語圏の
旅行案内書からみた東京の観光名所の空間分
析. 地学雑誌117: 522-533.
- 高槻幸枝 2004. ガイドブックにみる「名所」
の変遷—1830年代の江戸から2000年の東京
まで—. お茶の水地理44: 43-54.
- 滝波章弘 1995. ギド・ブルーにみるパリの
ツーリズム空間記述—雰囲気とモニュメント
の対比—. 地理学評論68A: 145-167.
- TAC出版 2021. 『横浜 第3版』(おとな旅ブ
レミアム) TAC出版.
- 南宮智娜 2017. 韓国と中国の旅行ガイドブッ
クにみる東京の観光名所の出現頻度と空間分
布. 地理学評論90A: 348-362.
- 西山 萌・加賀美雅弘 2016. 横浜における観
光空間の形成と変容—昭和初期の旅行ガイド
ブックを用いた分析—. 学芸地理72: 23-41.
- 堀野正人 2002. 観光における横浜のイメー
ジに関する一考察. 奈良県立大学研究季報
12-3・4: 177-182.
- 正木 聡 2009. 最近の観光ガイドブックの内
容分析からみる個人旅行の動向について.
日本観光研究学会全国大会学術論文集24:
61-64.
- 正木 聡 2015. 日本と外国のガイドブックか
ら見る横浜地域の観光対象に関する研究.
日本観光研究学会全国大会学術論文集30:
265-268.
- 松山 薫 2012. 英語圏の主要ガイドブッ
クにみる山形県庄内地域に関する記述—
Lonely Planet社の“Japan 11th edition”を事例と
して—. 東北公益文科大学総合研究論集21:
95-106.
- 溝尾良隆 2009. 観光資源と観光地の定義. 溝
尾良隆編著『観光学全集第1巻 観光学の基
礎』43-57. 原書房.
- 山口太郎 2015. 観光ガイドブックの写真掲
載頻度による長崎市の観光空間の再編成.
日本観光研究学会全国大会学術論文集30:
261-264.